

二〇二二年度・学力検査問題【国語】

(中学第一回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
- 四、問題は10ページで□・□・□の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。

一

1～5の——線の漢字と同じ漢字をふくむものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 郊外にテンキヨする。
- 2 公開コウザに参加する。
- 3 ヒヨウパンの高い店。
- 4 手先がキヨウな人。
- 5 例外をヨウニンする。
- ア 思い出がキヨライする。
イ 入学をキヨカする。
ウ はつきりとキヨシユする。
エ キヨジュウ空間を整える。
ア コウドウに集まる。
イ 貴重なコウセキ。
ウ ある組織のコウボウ。
エ 土地をコウサクする。
ア 道路ヒヨウシキに従う。
イ ヒヨウの精神を育てる。
ウ ヒヨウガ期が訪れる。
エ 豊かなヒヨウジョウ。
ア 正確にキロクを残す。
イ 平安キゾクの生活習慣。
ウ 母の実家へキセイする。
エ ガツキを鳴らす。
ア 真夏のタイヨウ。
イ 整ったヨウシ。
ウ 十分なエイヨウを摂る。
エ ヨウシヨウ時の思い出。

二

次の〈A〉〈B〉の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。（ただし、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。）

智也（小学四年生）一家が移り住んで三ヶ月、その古い家には、時おり座敷わらしが現れます。智也はエースストライカーである六年生の女の子カッチちゃん（菊地桂）が率いるサツカーチームに加えてもらい、活動を続ける中で親交を深めて来ました。カッチちゃんは、見えないはずの不思議なものが見えてしまうという少し変わったところがありますが、周囲の人達にはわかってもらえず、実は、本人も悩んでいます。そんなある日、カッチちゃんが両親の複雑な事情から智也の家に泊まりに来ることになりました。

〈A〉

「智也、やっぱ神戸はごついわ。カツラは久々にUFOを見た。何回も。編隊で飛んでいる時もあったよ。V字型で、五つ、いや六つぐらい。UFOだけじゃない。堤防で変なものが釣れたんだ。人の顔をした魚。逃げられたけど、声も聞いた。カツラに『なんや、われ』って確かに言ったんだ。大人はどうせ信じへんから、ずっと黙ってたんだけど、ほんまやで、これ」

頭をもたげて、カッチちゃんの顔を覗きこんだ。豆電球を見つめている猫に似た目がきらきら光っていた。目玉は不安そうに動いていた。智也は言った。

「もちろん信じるよ。だって、カッチちゃんがそう言うんだから」「そうか」

カッチちゃんが顔を隠そうとするみたいにあとんを鼻の上まで引き上げる。

両足をいったん揃えないと昇れない不規則な足音だ。

と、と、と、と。

智也はふとんをはねのけて飛び起きた。

「来る」

「クルス？ リカルド・クルス？」

「ううん、座敷わらし。足音、聞こえない？」

ふとんから顔を半分だけ出したカッチちゃんが首を横に振った。目玉が大きくふくらんでいる。

「姉ちゃん、起きて」姉ちゃんに声をかけたけれど、返事はない。

と、と。

階段の上で足音が止まった。

「襖の向こうにいる」

カッチちゃんはまばたきが止まった目を一瞬だけ走らせてから、毛布をかぶってしまった。智也は襖へ近づくと、顔はカッチちゃんに向けたまま。

「いい、カッチちゃん、開けるよ」

返事はない。智也が前に向き直ったら、襖は閉じたままなのに、もう部屋の中に座敷わらしが立っていた。

目を見張っている。いつも何かに驚いたような目をしているから、初めて見るカッチちゃんに驚いているのかどうかはわからない。

座敷わらしの姿はいつもと少し違って見えた。何が違うのか最初、智也にはわからなかった。

「やあ、ひさしぶり。元気だった？」カッチちゃんを安心させるために、必要以上の明るい声を出す。「この人は菊地桂さん、ぼくの友だちなんだ」

座敷わらしが智也の顔を見返してきた。ようやくどこが違うのかが

「ねえ、カッチちゃん」続きの言葉が口から出るのを嫌がって、喉のあたりで懸垂していた。ずっと聞きたかったこと。でも、返事は聞きたくないことだ。「転校しちゃうって、ほんと？」

もそりとふとんが動いて、カッチちゃんが背中を向けてしまった。またまた長い間。でも、眠ったわけじゃないのは、体がもぞもぞしているからわかる。わざとみたいなあくびと一緒に答えが返ってきた。

「たぶん」

暗がりの中から、智也は思いっきり悲しい顔ができた。きつと眉毛はトランプのキングの口ひげみたいになかたちになっているはずだ。

「まだ先の話だろうけど。どこへ行くかも決まってるじゃないし」

声が震えないように注意して、富士山のかたちになっているに違いない唇をむりやり動かした。

「今度は近くにジュニアのチームがあるとこだといいいね」

カッチちゃんがあくび声で答える。

「どうでもいいよ、そんなこと。知ってるか、智也。クラブチームが女子を取るの小学生までだ。その先のジュニアユースには入れない」

ずいぶん長いあくびだった。知らなかった。なんて答えていいのかわからなかったが、何か言わないと、カッチちゃんがいま離れている三十センチ以上の遠くへ行ってしまうような気がして、智也は唇を動かして続ける。

〈B〉

階段で小さな物音が聞こえはじめた。

と、と、と、と。

もう寝なさい、何時だと思ってるの、と小言を言いに来る母さんのどつどつどつ、という足音とは明らかに違う。雨音みたいに小さくて、

わかった。ほつぺたの向こうにうつすらと襖の様子が映っている。体が透き通っているんだ。

なぜ？ 真夜中だから？ 秋になったから？ 窓から射しこむ月明かりのせい？ 智也がもう子どもじゃなくなったから？

※3 かんれき
バアバが言っていた。「座敷わらしがきちんと見えるのは子どもと、還暦になって子どもに戻った年寄りだけなのかもしれないね」と。

母さんたちが時々しか、それもない鏡やカメラ越しにしか見えないのは、そのせいじゃないかって。

「いる？ 智也、そこにいる？」

「いる？ と聞いているのは、座敷わらしのことじゃなくて、智也のことのようだ。カッチャンの声は細くかすれていた。シユートを決めるたびに「うおお」と雄叫びをあげる時とは別人。掛けぶとんをかぶったまま、尻もちをついて座りこんでいる。ふとんのすき間から自分の姿を探してきよろきよろしている目を覗き返して、智也はふだんよりずっとしつかりした声を出した。

5 「だいじようぶ、小さな子どもなんだ。信じて。ぜんぜん怖くないから」

ふとんからおそろおそろという感じでカッチャンの顔が出てくる。

「どこ？」

指をさした。やつぱり座敷わらしの体は透き通っている。おでこに襖の取っ手が透けていた。少しでも目を離すと消えてしまいうさだった。カッチャンが何度か首をひねってから声をあげる。

「あ、うん、いたいた」

見えてないみたい。カッチャンが目をごらしているのは、座敷わらしの斜め上の壁だった。座敷わらしのほうは、動物園へ遠足にやってきた幼稚園児みたいに、ばかりと口を開けてカッチャンの顔を眺めて

だった。

「たぶん」カッチャンに領いてから、意味が通じることが自信はなかったけれど、座敷わらしに尋ねた。「だっこしてもいい？」

座敷わらしは、こくと領いた。でも、それは、智也の真似をしたかっただけらしい。カッチャンが腰をかがめて近づくと、後ずさりをはじめた。クッキー並みの歩幅だったから、すぐに壁に行く手を阻まれて、蝶々の標本みたいに着物の袖を広げて壁に張りつく。

「このへん？」

「もう少し右」

「ここ？」

「もう一歩前」

カッチャンがひざまずいて、広げた両手を交差させた。座敷わらしが腕の中にすっぽり納まる。

「ファインセーブ」

智也が小声で叫ぶと、壊れ物を扱う感じだった両手の輪を少しすばめた。自分自身を抱きしめるみたいに。姉ちゃんより背の高いカッチャンがそうすると、まるでお母さんのようだ。座敷わらしが声をあげる。

「きゅっ」

「あ、いま、なんか聞こえた」

「座敷わらしの声だよ。喜んでるみたい」

実際には丸い目をさらに丸くしているのだけれど、嫌ではないらしい。座敷わらしは、ばかりと口を開けてカッチャンを見上げて、されるままになっている。

10 灯をつけるかどうか迷ったが、結局、やめた。窓からの月明かりにばかりと照らされた、カッチャンと座敷わらしの、きれいに彫刻された石像みたいな姿に見とれていたからだ。

(萩原 浩『愛しの座敷わらし』朝日新聞出版より)

いるのに。UFOや人面魚を見ているっていうプライドがあるから、意地を張っているんだと思う。

「なあんだ、ほんとうにただの子どもだな。これなら怖くない」

カッチャンは誰もいない壁を眺めて、うんうんと頷き続ける。何も言えずにいたら、細くなった眉をきゅつとすばめて、智也を見つめ返してきた。智也が黙って首を振って指をさし直すと、ほんの一瞬だけ、顔をくしゃりと歪ませてから、にこりと笑った。

「ごめん、嘘。カツラには見えないや」

その声は、見えないことに少しほっとしているように聞こえた。

「智也には見えるのか。お前、ちよっとおかしいな。カツラが通った病院に行ってみるか」

「うん、おかしいかも。でも、信じてくれる？」

7 「もちろん。だって、智也がそう言うんだから」

さっきの智也のせりふがそっくり返ってきた。

「どんな姿？」カッチャンが尋ねてくる。

※4 「すぐくちっちゃい。タクとヒナの中間ぐらいかな。おかっぱ頭で、以前、カッチャンが言ってたみたいに、てっぺんで髪の毛を結んでる。服は紺色の着物……」

実際には紺色のはずの着物の色は、いまの暗がりの中でさえ灰色に見えるほど薄くなっているのだけれど。

座敷わらしにしては珍しく、カッチャンには怯えていないようだ。

Tシャツに描かれたリトルマーメイドとカッチャンの顔を交互に眺めている。以前にもカッチャンに会ったことがあるのだろうか。それとも知っている誰かに似ているのだろうか。

「だっこしても平気？」座敷わらしを脅かさないためにだろう、カッチャンはいつもより声を細くして囁きかけてくる。すぐく優しい声

※1 ごつつい：関西弁で「程度がはなはだしい、すごい」の意。

※2 リカルド・クルス：アルゼンチン出身のサッカー選手の名。

※3 還暦：六十才。この年になると子どもに戻るといわれている。

※4 タクとヒナ：智也達の知り合いの子どもの名。

※5 クッキー：智也の家で飼っている犬の名。

問一 —— 線1「目玉は不安そうに動いていた」とありますが、こ

こでのカッチャンの心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の話が下手なために、智也に嘘がばれてしまったらどうしようと思っっている。

イ もし、これから智也が始める話がつまらなかつたらどうしようと思っっている。

ウ 智也が会話の途中で自分よりも先に寝てしまうかもしれないと思っっている。

エ 智也は自分の言ったことを受けとめてくれるだろうかと思っっている。

問二 —— 線2「カッチャンが背中を向けてしまった」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選び、記

号で答えなさい。

ア 年下でサッカーが下手な智也とは話したくなかつたから。

イ 自分にとってはふれられたくない話題だったから。

ウ サッカーで疲れており、とても眠かつたから。

エ いつもより冷淡な智也の発言に傷つけられたから。

問三 —— 線3「智也はふとんをはねのけて飛び起きた」・4「カッちゃんは……毛布をかぶってしまった」とありますが、ここでの智也とカッちゃんの心情の違いがわかるように説明しなさい。

問四 —— 線5「だいじょうぶ、小さな子どもなんだ。信じて。ぜんぜん怖くないから」とありますが、ここでの智也について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 座敷わらしが言う通りに動くことを示そうとしている。
イ 座敷わらしを見ようとしないうちにカッちゃんにいらだっている。
ウ 座敷わらしが見えるのは自分だけだと得意になっている。
エ 座敷わらしを怖がるカッちゃんを安心させようとしている。

問五 —— 線6「ほんの一瞬だけ、顔をくしゃりと歪ませてから、にこりと笑った」とありますが、ここでのカッちゃんについての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 座敷わらしが見えていなかったことを智也に指摘されてくやしさがこみあげてきたが、笑ってごまかした。
イ 座敷わらしまでも見えてしまったらどうしようと不安だったが、見えないことでひょうし抜けした。
ウ 座敷わらしが見えるという嘘がばれてしまった決まり悪さがある一方、それが見えなかったことに安心した。
エ 座敷わらしが見える風を装ってきたが、それが見えなかったことであって素直になれた。

問九 —— 線10「灯をつけるかどうか……見とれていたからだ」とありますが、この表現について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 月明かりに照らされてこわごとと座敷わらしを抱いているカッちゃんの緊張が智也にも伝わり、張りつめた空気が広がり始めたことがうかがえる。
イ 目の前の幻想的な光景の美しさに深く感動し、この時間がこのまま続いてほしいと願うとともに、それを見守る智也自身の変化もうかがえる。
ウ もし灯をつけてしまったら、座敷わらしがはっきりと見えカッちゃんが驚いてしまうのではないかと、智也が気をつけている様子がうかがえる。
エ 青白い月の光に照らされていることで、今後のカッちゃんを待ち受けている不幸な未来について智也が予感していることがうかがえる。

問十 本文について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 比喩を用いて感覚的に説明しながら、純粋な心の世界を冷ややかに描いている。
イ 登場人物それぞれの視点から夢と現実が交じり合った世界を表現し、人間の心の深部を描いている。
ウ 日本古来の妖怪を登場させてユーモアを交えながら、一方で心のつながりの不確かさを描いている。
エ 会話文や短文を多用し、語り手が主人公の視点に寄り添って登場人物たちの心の交流を描いている。

問六 —— 線7「さっきの智也のせりふがそっくり返ってきた」とありますが、ここでのカッちゃんの心情を説明しなさい。

問七 —— 線8「壊れ物を扱う感じ」とありますが、ここでのカッちゃんについての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 座敷わらしを驚かせないように、丁寧にふれようとしている。
イ 座敷わらしが危険なので、注意深く扱おうとしている。
ウ 座敷わらしがあばれないように、慎重に抱こうとしている。
エ 座敷わらしは気味悪いが、何とか近づこうとしている。

問八 —— 線9「自分自身を抱きしめるみたいに」とありますが、ここから読み取れる内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 座敷わらしとの出会いによって、カッちゃんの家事情が解決したことを表現している。
イ 智也の楽しいくらしを知り、カッちゃんもこの家でくらしたいと思っていることを表している。
ウ 家庭の事情で落ちこむ自分を励ます智也の気持ちに、カッちゃんが感謝していることを示している。
エ 座敷わらしを包みこむようにすることで、カッちゃんがあるのまの自分を受け入れたことを暗示している。

三

次の文章は、元宇宙飛行士で現在は日本科学未来館の館長、毛利衛氏の文章です。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、省略した部分・表記を改めた部分があります。(ただし、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。)

1 種を存続させるためには、集団を作り上げたほうが生き延びやすい。集団を作り上げるためには、集団のルール、システムを定めないとけない。たとえばハチも社会を作るわけですが、唯一産卵できる女王バチがいて、働きバチがいて、一方で雄バチがいるというように、生き延びるための高度なシステムが備わっています。そして、ハチと同じように、人間もルールやシステムを作ってきました。それが政治であり、宗教であり、経済であり、法律であつたわけです。

人間は、集団が生まれた時から **A** 宗教に類したものを持っています。種が生きるためには互いに共感し合うものが要だということでしょう。厳しい自然環境の中でまとまって生きるために、自然を神として崇拜したり、擬人化された観念としての神を作ったりして宗教を形成し、後にはそれを封建主義や王権神授説などと結びつけて利用し、社会として生き延びるようになりました。このような、集団を存続するための工夫の一つが科学であり、技術であり、あるいは芸術であり、あるいはスポーツなのではないか。私は科学をそう捉えるようになりまし。つまり、地球を外から見て以来、私は科学は人間を集団として存続させる手段として生まれたと、はつきり考えるようになったということです。

科学は自然を理解する方法の一つです。自然を確実に理解する方法があると、たとえば太陽の位置によって田植えの時期を判断することができるようになり、生きながらえることが容易になります。蒸気機

関を生んだ技術も、それまでは考えられなかったような大量輸送を可能にし、食料や資源を世界規模で流通させることになりました。芸術も然り。たとえば美しい音楽を聴くことによって、精神が安定し、ひいては集団が安定します。**B** この世に音楽というものがなかったら、世の中はもつと殺伐としていて、犯罪も非常に多かったかもしれません。

私はこのような、個体としての人間、集団としての人類を生きやすくして生命を次につなげていくためにわれわれが編み出した様々な智慧、いわば総合智を「文化」だと定義したいのです。

文明とは少し違います。文化は工夫という行為の繰り返し、つまり一つひとつの努力のステップを積み分したものと考えます。これに対して文明は、あるとき稲の栽培が始まったといったような、歴史の中のある出来事を一点で微分したものを、足し合わせた集合体であるように思っています。

語源で考えるとわかりやすいと思うのですが、文化 (culture) は cultivate するもの、cultivate されたものであって、常に耕し続けることを指すわけです。「携帯電話は文化になりましたね」といった言い方がありますが、これにも一般の方の間に耕すように浸透していつて、いつの間にか子供や高齢者にも広がっていったというニュアンスが感じられますね。でも、「携帯電話は文明になった」という言い方はあまりされません。

ヨーロッパでは、科学は神様の意図を知るための方法論でした。

自然を創るために神様はどんな地図を作ったのか、どんな構造を持った世界を意図したのか。科学はそれを理解するために進歩してきました。科学者一人が扱う自然の範囲は、時代と科学自体の進展につれてど

見ていく発想ですね。

なぜこの発想が必要になっているのか、それは、従来の要素還元方式だけでは限界が見え始めているからです。特に、環境問題においてその傾向が顕著です。

環境問題を分析する時に、従来の方法ではまず地球の事象を個々に解析してコンピュータに入力して全体を捉えようとします。ところがパラメータが多すぎて、スーパーコンピュータを扱うのが何をしようが、信頼に足る解答が導き出さずいらぬのです。

D、それぞれの事象のシミュレーションはできるでしょう。たとえば、大気層がこのぐらいで二酸化炭素がこれだけ増えると、太陽熱がこれだけ注がれた時に、宇宙に逃げる熱はこれだけだから、平均温度が上がって温暖化がここまで進みますという程度なら、荒っぽいけれどもあるレベルの予測はできる。ではそれが、他の事象とどのようにつながって、さらには人間の社会がどうなっていくのだろうと考えると、そこは人間の意識のあり方によって大きく左右されるわけですね。

ですから私は、科学技術は文化であり、総合智の一面を担うものであるというように捉えたいのです。

文化とは、さまざまな要素をインテグレート (総合) させる試みを積み重ねた上で生まれてくるものです。科学技術が切り拓く新しい知や産物も、そうした要素になるのです。物事は多方面から理解する必要があるですが、その一つが科学的理解になるのですね。

同時に科学には、個々の人間に 人類全体のことを思い起こさせる力がそなわっています。

人間は基本的に、人間全体のことを考えようとはせず、自分のことしか考えません。いまでも多くの現代人が、自分のこと、家族のこと、会社のことしか考えていません。だからその意識をどうやって変えていくかというヴィジョンがないと、おそらく二十一世紀中に、地球温

んだん細くなっていきます。要素還元法といいますが、そうやって最終的に一番小さなものを理解し、それを組み合わせたら自然界がわが手に入るという発想が出てくるわけです。

そうした方法で調べていけば、対象は分子になり、原子になり、原子から核になり、電子になり、**C** クォークになると、どんどん細かくなっていったのが科学の行きついた方向でした。二〇〇三年にはヒトゲノムの解読が完了したことによって、人間の遺伝情報が読み取れるようになりました。これは私的な解釈ですけども、私はあの時「これで科学技術による革命が起きた」と思った。いままでの科学を根本からくつがえす革命が起きたということです。

それ以前の科学が生み出してきた方法論は、世界は神様が創ったもので、人間だけがその世界を理解できるという前提がありました。しかし、その行きつく先で人間を調べてみたら、なんのことはない、人間も特別ではないことがわかってしまった。宗教の世界では、人間は特別であり神様に似せて創られたもので、その人間が追究してきた科学も、人間同様に生物界を支配するという意識のもとで進んできました。しかしそんな人間も、地球上のほかの生物と同じように、DNA の配置を変えたり、組み合わせや大きさを変えたりするだけで、ほかの生物になってしまうことがわかったわけです。地球に住むすべての生物は、そのような組み合わせを変えただけということです。これはおそらく、科学に対するいままでの考え方を、根本的に変えてしまったのではないかと思います。

そこでいま、これまでの西洋科学で無視されてきた、アジア的なものの見方や考え方に注目が集まっています。つまり、生命は部分ではなく、全体として見た時に価値が生じるという考え方です。人間の体を見て、頭だけが特別だとか、手だけが特別だということではなく、足の裏を押すと全体的に健康になるといったように、全体をつなげて

暖化に代表される大きな環境変化の中で、人類がいまのような生き方を続けることはできなくなっていくでしょう。

その時、科学は地球全体を俯瞰して課題を提示し、警告を発します。裏を返せば、そのような提示や警告が、科学技術を担う者の使命の一つになるということです。

しかし、科学は特別であるという発想でやってきた人たちは、いまも象牙の塔に閉じこもったままです。そんな彼らに、科学は何のためにあり、あなたは何のために研究していますかと質問すると、「科学の発展のため」「自分の好奇心のため」などと、真顔で答える人がいます。

私は、未来館で働く、科学コミュニケーターをはじめとするスタッフに、もつと物事の本質を知ってほしいと伝えています。これからは人間が扱うエネルギーが大きくなり、情報交換と移動もますます簡単になります。一方、地球の大きさ、資源の量、そして生命の営みは根本的には変わりません。人間社会だけではなく地球生命の根源にかかわるいろいろなことが起きるでしょうし、その問題解決のために科学技術が演じる役割も大きい。そして同時に、それらの問題を科学技術だけの力で解決できるとはとも思えない。政治、経済、スポーツや芸術の分野も含めた力を総合智として総動員しながら事に向かわない限り、解決は不可能です。だからこそ、科学技術を担う者も、総合智の一翼を担うという意識を持つべきなのです。

「政治や経済はともかく、スポーツや芸術まで含めて総動員させるなんて、大袈裟だなあ」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、そう考える方は、一つの事実を過小評価されていると思います。

その事実とは、我々にはすでにエネルギー資源の限界、地下資源の限界がわかってしまっていることです。わからない時はまだよかったけれど、科学的に調べた結果、われわれにはわかってしまった。その瞬間、われわれはいままでとはまったくレベルの違う人類になったわけです。

いままでは地球全体が孤立系だという認識がなく——科学的にはなく、われわれの生き方において——無限の広がりを持っていました。水はいくら使っても大丈夫だとか、食べ物はいくらでも畑から生まれてくるとか、石炭はいくら掘っても大丈夫だなどと、さしたる不安を感じることもしないに信じ込んでいたわけです。

ところが地球は物質的に孤立系だったのです。世界中の国が、たとえばいまのアメリカのようなエネルギーの使い方をすれば、地球温暖化やエネルギー供給の問題も重なり、いまでさえ世界は瞬時に破綻するでしょう。

そんな時代ですから、未来館は科学技術を総合智、つまり文化の一つとして政治、経済、芸術、スポーツなどと一緒に新しい智慧を駆使すべき分野だと捉え、それを媒介に社会とコミュニケーションしたいと考えているわけです。

もちろん、我々が取り組むべき問題は、エネルギー問題だけではありません。前述の環境問題や、水・食料の問題など喫緊の課題が山積しています。

私は、こうしたさまざまな問題を解決する智慧の源は、「四十億年の生命史」にあると考えています。

二〇〇三年のヒトゲノム解読によって、地球上の生物に遺伝的な隔たりはなく、すべてつながっていることが明らかになりました。宗教上や観念上のことではなく、事実にもとづく「つながり」が確認されたのです。ならば、生命四十億年の歴史から、地球上の問題の解決の糸口になる、普遍的な智慧を紡ぎ出すことができるのではないでしょう。生命の普遍的な流れに基づくつながりを見定めることは、今後の科学技術にとって大変重要なことであるように思われます。

(毛利 衛『日本人のための科学論』PHPサイエンスワールド新書より)

問四 「」の部分で筆者が述べようとしていることがらの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 現代人は「文明」より「文化」を重んじるということ。
- イ 世界には民族固有の英知があふれているのだということ。
- ウ 「文化」は人類の営みが積み重なったものだということ。
- エ 現代の「文化」は携帯電話に象徴されているということ。

問五 ——線3「これまでの西洋科学」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア アジア的な考え方とは違った、対象全体の価値を尊重するという研究姿勢が中心だったこと。
- イ アジア的なものの見方から学び取った、全体像をコンピュータで把握する傾向があったこと。
- ウ アジア的な考え方の成果である、部分的に理解した上で総合的に理解するという智は存在しなかったこと。
- エ アジア的な発想とは異なり、対象を分解して考えることを通して全体の理解が可能になると考えてきたこと。

問六 ——線4「物事の本質」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 科学的な研究機関での資源利用さえも節約しながら、世界全体の幸福の追究を進めるべきだ、ということ。
- イ 有限な資源を地球全体で管理するため、有能な科学力の制約を第一と考えることもしかたがない、ということ。
- ウ 地球的規模の問題解決に向け、文化のさまざまな分野を総動員する中で科学の使命を考察すべきだ、ということ。
- エ 地球存続に向けた協調の一つの手段として、科学と芸術は一体化しなければならない、ということ。

※1 cultivate…耕すこと(英語)。
※2 バラメータ：コンピュータプログラムを実行する際に設定する指示項目。

※3 ヴイジョン：将来を見通す力。

※4 俯瞰：高いところから見下ろし眺めること。

※5 象牙の塔：現実とかけ離れた学者の生活をたとえた表現。

※6 破綻：物事が完全に立ち行かなくなることを。

※7 媒介：仲立ちとすること。

※8 喫緊：差し迫った重要なこと。

問一 A Dに入ることを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使ってはけません。

ア さらに イ もちろん ウ もし エ すでに

問二 ——線1「種を存続させる」とありますが、人間はどうすることによって種を存続させてきたのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然と共存するための政治や宗教を作り出すこと。
- イ 共感できる要素を生み出して集団を作り上げたこと。
- ウ あらゆる場所に便利な公共システムを配備すること。
- エ 自然環境を完全に支配するシステムを生み出すこと。

問三 ——線2「芸術」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 精神を落ち着かせ、集団を維持するための智慧の一つ。
- イ 犯罪を減らすために創造される、精神的な活動のすべて。
- ウ 全体の共感を保つために考案された、集団の決まり。
- エ 宗教の次に現代社会に浸透した、感性の集大成。

問七 ——線5「普遍的な智慧を紡ぎ出すこと」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ困難が予想されても、問題解決に向けて政治や宗教を超えて国際社会全体のバランスを保とうとすること。
- イ 人間が遺伝的には他の生物と違うことを自覚し、他の生物に救いの手を差しのべてゆこうとすること。
- ウ エネルギー問題、環境問題、水・食糧問題を解決すること
- エ 問題を解決するために、その前提を地球全体の生命の「つながり」に求めるということ。

問八 ——線「これで科学技術による革命が起きた」と思った」とありますが、筆者がこのように表現した理由の説明として最も適当だと思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間までもが最小単位の物質レベルにまで分析・分解できる手法を通して操作・支配がたやすくなったことについて、従来は神の領域とされた部分への科学の侵略と重く受け止め、批判的な考えを持つようになったため。

イ 人間だけが特に優れているわけではなく、その成り立ちは他の生物と何ら変わりがなくすべてつながっている、ということ突き止めたことで、これまでの科学が根本から変わってしまったという衝撃を受けたから。

ウ 人間自身が生み出した科学とはいえ、これまで命の尊厳に踏み込む研究だけは敬遠して来た経緯もあったことから、未知の領域まで踏み込むようになった人間の能力の果てしなさを改めて誇らしく思い、興奮を覚えたため。

エ 人間と他の生物との隔たりについて、自然科学の分野では完全に解消されたため、いずれ人類は人間としての尊厳を失い、特別な存在ではなくなってしまうのではないかという悲観的な考えを持つに至ったから。

解答用紙(中学第一回)

氏 名

得 点

1
2
3
4
5

問二

[illegible]

7

11

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com/> at 11:06 11 November 2014

7

5

11

A
B
C
D

7

7

10

5

1

11

1

11

11

11

10



11